

—物の見方、考え方— 経営に生かす仏教哲学

青木伸雄

1. まえがき

縁とは不思議なもので、菩提達磨画を書いて60数年以上たってしまった。

中国高山少林寺、釋永信方丈より釋禪禪という法名を伝授され菩提達磨画もやっと人並になった。

禅画も仏像版画も、自然と手を合せたくなる域に達しないと一人前ではないといわれている。

ただ形だけ整った菩提達磨画も、教えをただひたすら習学する“守”から練達の名人の作品の研究修学の“破”。そして独自の画風に達して認められる“離”に達するには相当の年月を要する。

今、やっと雄峰の麓にたどりついたのである。身を引きしめてこれからボツボツ登ろうと思う。

新しい年の出発にあたって、80歳をすぎても肉体労働をとまなう作務を怠たらず、勤労を尊び、ただひたすら昨日を悔やまず、明日を憂えず、再びめぐってこない今日一日を無駄に過ぎず、全力を尽くす教えを残した百丈懐海（中国禅宗の馬祖道一の弟子、大智禅師）禅師の「一日不作、一日不食」の教え。ピーター・ドラッカーの「禅画論と思考」、世親菩薩の阿毘達磨俱舍論の「見聞覚知」等について学び考えてみたい。

特にピーター・ドラッカーは、一般に哲学者というよりマネジメントの先覚者として知られているが、つたない愚生の知る限りの知識で述べると我が国の文化、特に仏教文化に対する憧憬、知識は敬服に値する。要は、我が国に古くから存在するすばらしい文化が外国の方々の「物の見方、考え方」のなかにとり入れられていることである。

かつての日本人は広く知識を世界に求めて学び、良いものを積極的にとり入れたといわれている。

現在の日本人に何か欠けている気がする、その欠けているものを教えてくれるのがピーター・ドラッカーの思考である。

数多くの経営者、管理者は是非、ピーター・ドラッカーの多くの著書を購入して勉学されることを期待したい。

日本人の習合思想、いわゆる相異なる思想、教理などを折衷、調和して活用する「物の見方、考え方」のすばらしさをこれからの経営に生かしていただきたいと考える。

2010年の年頭にあたって釋禪禪は「他思故有我」でないと全てが失敗すると愚考する。

世界同時不況下の経営は、全てを相手のせいにするのではなく、今、何をなすべきかを思い考え、最善を尽す道をさがし努力することだと愚考する。

2. 「一日不作、一日不食」を知る

人間は何故働くのかという問いに対して、多くの人々はよく「食うために働く」という言葉で話されているが、働くから食えるのであって、食うこと自体が、目的で働いているとは思えない。

仏教の教えに、中国唐時代の禅僧で百丈懐海（720～814）の「一日不作、一日不食」、いわゆる「一日作さざれば、一日食らわず」という教えがある。

「五燈会元」に「師、凡そ作務して勞を執るに、衆に先立つ」とあり、百丈和尚は80歳の高齢になっても作務（禅寺で禅僧が行う農作業、掃除などの労働一般、仏道修行として重視）を、修行僧の先頭にたつて毎日、休まず実践されていたと述べられている。

百丈和尚の老体を心配した弟子達との逸話に作務ができずに、できなかった三日間、食事をとらなかつたことが述べられている。

これは弟子達が百丈和尚が作務を止めて畑仕事を休ませる進言に耳をかさず老体にむちをうつ姿を見るにしのびず畑仕事の道具の鋤や鍬を隠したことに端を発した行為から生じた教えである。

結果として、鋤や鍬がみつからず百丈和尚は作務を休むことになり、作務のできなかつた三日間、一切の食事をとらず弟子達に示した実践教育である。

常に弟子の修行僧の先頭にたつて実践した老僧の教えが「一日不作、一日不食」の教えで、「働かざれば食うべからず」という考え方の基本なのである。

食べて寝ることなら、犬でも猫でもできることであり、いわゆる畜生、人にやしなわれている禽獣、虫魚と同じであり人間なら、人間らしく思慮的に行動することを求めた教えである。

著者：広島大学生物生産学部講師
元近畿大学産業理工学部客員教授
日本禅画家協会名誉理事
中国少林書画院名誉教授
法号位 法印 禅画位 奥伝
青木伸雄
釋禪禪（野風生）
雅号 樹泉